

けいせいあわ なると

## 傾城阿波の鳴門

〔解説〕 明和五年（一七六八）六月、竹本座初演。近松半二、竹本三郎兵衛、八民平七らの合作。夕霧伊佐衛門を題材にした近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」をもとに、阿波徳島、玉木家のお家騒動を絡ませたものです。当時、阿波の浪人が、大坂玉造に仮住まいをして、詐欺・ゆすり・追いはぎなどを働いていた。ある日、順礼の子が、金を持っているのを知り、だまして家に連れ帰り、深夜しめ殺して、死体を畑へ埋めた。しかしこれが露見したため、召し捕られ、重罪に処せられた、という実説を取り入れています。

〔あらすじ〕 阿波徳島玉木家の若殿が遊女におぼれているのに乗じて、悪家老の一味はお家横領を企てていました。同じく家老の桜井主膳はこの状態を憂えていたのですが、預かっていたお家の重宝「国次（くにつぐ）」の刀を盗まれてしまいます。この刀の探索の為、家臣十郎兵衛は、銀十郎と名を変えて、妻お弓とともに盗賊の仲間に入ります。ある日、十郎兵衛の留守に、順礼の子が門口にやってきました。お弓は、話を聞くうちに、国元に残してきた娘のおつるとわかりますが、親子と名乗ると盗賊の罪が娘にかかることを恐れ、一旦は追い返します。しかし、今、別れてはもう二度と会うことが出来ないと思ひ直し、おつるの跡を追います。

## 順礼歌の段

へふるさとを、遙々こゝに、紀三井寺。

「順礼に御報謝」

と、言ふも優しき国訛。

「テモしほらしい順礼衆、ドレドレ報謝進ぜう」

と、盆に白米の志、

「アイアイ、有がたうござります」

と、言ふ物腰から棲外れ、

「可愛らしい娘の子、定めて連れ衆は親御達、国は

いづく」

と尋ねられ、

「アイ、国は阿波の徳島でござります」

「何ぢや徳島、さつてもそれは、マア懐しい。わし

が生れも阿波の徳島、そして父様や母様と一緒に順

礼さんすのか」

「イエイエ、その父様や母様に逢ひたさ故、それで

わし一人、西国するのでござります」

と、聞いてどうやら気にかゝる、お弓は猶も傍に寄

り、

「ム、父様や母様に逢ひたさに、西国するとはど

うした訳ぢや、サそれが聞きたい、言ふて聞かしや

〜」

「アイ、どうした訳ぢや知らぬが、三つの年に父様

や母様も、わしを婆様に預けて、どこへやら往かし

やんしたげな。それでわたしは婆様の世話になつて

往たけれど、どうぞ父様や母様に逢ひたい、顔が見

たい。それで方々と、尋ねて歩くのでござります」

「ム、シテその親達の名は何というぞいの」

「アイ、父様の名は十郎兵衛、母様はお弓と申しま

す」

と、聞いて吃驚り、

「ア、コレコレ、アノ父様は十郎兵衛、母様はお

弓、三つの年別れて、婆様に育てられてみたとは、

疑ひもない我が娘」

と、見れば見る程幼顔、見覚えのある額の黒子、

「ヤレ我子か、懐しや」

と言はんとせしが、『待て暫し』

「オ、それはまあまあ、年端も行かぬに遙々の所

を、よう尋ねに出さつしやつたのう。その親達が聞

いてなら、さぞ嬉しうて嬉しうて飛立つ、サア、飛

立つ様にあらうが、儘ならぬが世の憂きふし。身に

も命にもかへて、可愛い子を振り捨て、国を立退く

親御の心。よくよくの事であらう程に、酷い親と必

ず必ず恨みぬがよいぞや」

「イエイエ勿体ない、何の恨みませう。恨みる事は

ないけれど、小さい時別れたれば、父様や母様の顔

も覚えず、余所の子供衆が、母様に髪結うて貰うた

り、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母

様があるならあの様に髪結うて貰はうものと、羨や

ましようござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい、ひよ

つと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござん

す」

と、泣いちやくりするいちらしさ、母は心も消え入

る思ひ、

「さてもさても世の中に、親となり子と生るゝ程深

い縁はなけれどもナア、親が死んだり子が先立つた

り、思ふ様にならぬが浮世、こなたもどれ程尋ねて

も、顔も所も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮ない事。

もう尋ねずと、国へ往んだがよいわいの」

「イエイエ、恋しい父様や母様、たとへいつ迄かゝつてなど、尋ねうと思ふけれど、悲しい事は一人旅ぢやてゝ、何処の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては、た、た、叩かれたり。怖い事や悲しい事も、父様や母様と一所にゐたりや、こんな目には逢ふまい物を、何処にどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたい事ぢや逢ひたい事ぢや、逢ひたい」

と、わつと泣き出す娘より、見る母親はたまり兼ね、

「オ、道理ぢや、可愛や、いぢらしや」

と、我を忘れて抱き付き、前後正体嘆きしが。

「コレ、何ぼ一人旅でも、たとと銭さへやりや泊める。わづかなれども志、この金を路銀にして、早う国へ去にや、ヤ、必ず必ず煩ふてばしたもんな」

と、金を渡せば押し戻し、

「アイ、嬉しうござんすれど、金は小判といふ物を、たとと持つてをります。そんなりやまうさんじます、忝なうござります」

と、泣く泣く立つを引きとゞめ、無理に持たして塵打ち払ひ、

「コレ、もう去にやるか、名残りが惜しい、別れとむない、コレ、マ今一度顔を」

と引き寄せて、見れば見る程胸迫り、離れ難なき憂き思ひ、それと知らねど誠の血筋、名残り惜げに振り返り、

「どこをどうして尋ねたら、父様や母様に、逢はれる事ぞ、逢はしてたべ、南無大悲の観音様」  
父母の、恵みも深き粉川寺、泣く泣く別れ

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。